

御霊の深いうめきによるとりなしの祈り

【聖書箇所】 8章 18～30節

はじめに

●聖書の中で最も深い神の恵みを示していると言われるローマ書 8章の中に、最も深い感情表現であると思われる「うめき」が出てきます。一つ目は「被造物のうめき」(8:22)、二つ目は「神の子のうめき」(23節)、そして三つ目は、「聖霊のうめき」(26節)です。自然界の苦悩、人間の苦悩、そして神の苦悩と言われるのですが、神の救いは単に神がすばらしい救いを絵に見せてくださるものではありません。私たちの現実の生活において、神の恵みは苦しむ者を救い、うめく者を救い、助け、支え抜いて下さるのです。今回は、特に、神の救いが私たちの内に実現するために、神自ら私たちの内側に住んで、うめきをともにしてくださるといふすばらしい事実を目を向けてみたいと思います。

1. 祈りを助ける御霊のうめき(26～27節)

【新改訳改訂第3版】ローマ人への手紙 8章 26～27節

26 御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなししてくださいます。

27 人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。

●イエシュアを信じて救いにあずかった者が、しばしば戸惑うのは、祈りということではないかと思えます。特に、人の前で「祈ってください」と言われると、それだけで冷や汗が出て、自分でも何をどう祈ったらよいか分からず、そのうち心臓もバクバクしてきます。たとえ祈りはじめたとしても、途中でだれかが「アーメン」などと相づちすると、その一言で思いが中断して、祈ろうとしていたことばを忘れてしまった経験がないでしょうか。何とか祈り終わって、果たして何を祈ったのか思い出せないといった経験をしたことはありませんか。安心してください。とても励まされることばが聖書にあります。26節に、「**私たちは、どのように祈ったらよいかわからない**」とあります。「ああ、私だけではないのだ。」と不思議と納得して、安心させてくれることばです。

●私たちは、祈るにもどう祈ったらよいか分からない存在です。人前でも、人前でなくても、祈ることに抵抗を感じる人は少なくないと思います。ですから、教会の祈り会に集まる人数が礼拝に来る人数と比べると少ないわけです。クリスチャン生活において、祈りほど大切なことはないと言われるにもかかわらず、その祈りができない、祈れない、恥ずかしい・・・これが現実なのです。しかしそれでいいのです。自分の弱さをそのまま受け入れることが大切です。「どのように祈ったら良いのかわからないという」という「私たち」には、あなただけでなく、この手紙を書いている使徒パウロも含まれていることを心にとめ

ましょう。ある人は、「御霊は強い人を助けることができない。」と言いました。26節をもう一度読んでみましょう。「御霊も・弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてくださいませ。」と。これを書いているのは使徒パウロで、律法学者です。イエシュアを信じて救われる前は、おそらく人前で立派な祈りをしていたと思います。しかし彼が救われると、「どう祈ったらよいかかわからない」と言いました。そしてそんな私たちのために、御霊自ら、それも切なるうめきをもってとりなしてくださいませなのです。

●イエシュアの弟子たちが、イエシュアの働きにある力の源泉が、どうも祈りにあるらしいことを知って、イエシュアに「自分たちにも祈ることを教えてください」と求めました。するとイエシュアは「主の祈り」と言われる祈りの模範をお示しになりました。「天にいます私たちのお父さま・・・」と呼びかけるように教えられました。この呼びかけは、天の父が決して厳めしい方ではなく、むしろ親しいすばらしい父であり、私たちの必要をすべて知っておられて、私たちがいつもその父のみもとに親しく近づくことを求めておられる方であることを意味するものです。なぜなら、その交わりによって、父との結びつきがより一層深くなり、成長することを望んでおられるからです。また天の父は自分の子どもたちに喜んで良いものを与えたいと願っておられるゆえに、それを求めるようにイエシュアは弟子たちを励まされました。

●天の父が最も与えたいと望んでおられる最も良い贈り物とは何でしょうか。それは聖霊なる方です。モノではありません。パーソンです。父の心を私たちに教えてくれる方です。そして私たちの祈りを助ける方です。

●「祈りを教えてください」と願った弟子たちに対して、イエシュアの祈りについての教えのクライマックスは、あなたがたが本当に祈る者になりたいのなら、聖霊を求めなさいということでした。

『権力によらず、能力によらず、わが霊によって』と万軍の主は仰せられる。」と語った預言者ゼカリヤは、聖霊のことを「恵みと祈りの霊」と表現しました。聖霊は祈る心を起こさせ、祈りに力を与えて下さる方なのです。ですから、聖霊が注がれるということは、祈りの霊が注がれるということなのです。いつの時代でも、神が新しいことをなさる時には、聖霊が働いて、人々を祈りへと追い込むということは決して不思議なことではないのです。

●祈りに弱さを覚えている者は幸いです。なぜなら、「御霊は弱い私たちを助けて下さる」ために遣わされているからです。私たちの祈りは情けないほどに弱々しく、力なく、低空飛行をしていて、いつ墜落してもおかしくない状態です。そんな私たちのうちであって、御霊はうめきをもって私たちのためにとりなしてくださいませなのです。それは言葉にならないうめきであると言われていています。

●私は長い間、祈りについて悩んでいました。祈りの力についていろいろな書籍を読み漁りながら、自分の祈りはその域にほど遠いことをずっと感じていました。しかし、異言の祈りという祈りによって、これまで以上に、神との親しさや知恵と啓示の御霊の助けを感じるようになりました。「弱い私たちを助けて下さる」ということばは、弱さをともに負ってくださる、重荷を分かち合ってくださいませという意味です。で

すから、このことばからも分かるように、御霊は自動的に働いてくださるのではなく、「ともに負ってくださる」「分かち合ってください」わけですから、**私たちの同意が必要**なのです。このように御霊は実に紳士的です。強制することなく、いつもへりくだって私たちを助け支えようとしてくださる方として、救いにあずかった者たちの中にいてくださるのです。

●御霊の助けを受ける唯一の条件は、私たちの祈りの弱さの自覚であり、無力さの自覚です。弱さが御霊の助けを受ける条件であることを忘れないようにしましょう。聖霊は全能の御霊ですから、その助けの領域は広く、しかも無限なのです。しかも御霊の言いようもない深いうめきによるとりなしの祈りは、神のみこころに従って、しかも聖徒ひとりひとりのために必要なとりなしがなされますから、その祈りは聞かれていくのです。次第に、その人自身が霊的に建て上げられていくのです。御霊は、ある時は、飢え渴きを起こさせて祈りに追い込んだり、みことばを開いて理解させ、みことばの確かな約束を握らせたり、罪を示して悔い改めに導いたり、人を通して励ましたり、慰めたりします。

2. 御霊の究極的目的—御子の姿に似た者とする事(28~30 節)

●ところで、私たちに対する御霊の究極の目的ははっきりとしています。それは何かと言うと、私たちをキリストの似姿に変えることです。それはすでに始まっています。その完成はまだです。

【新改訳改訂第3版】Ⅱコリント 3章 18節

私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

●小さい頃、鏡を使って太陽の光を反射させて遊んだことがあるのではないかと思います。鏡は太陽の光の強さを反映させます。それと同じように、私たちも聖霊の助けによって、私たちが鏡のように主の栄光を反映させる者となるのです。私たちを栄光から栄光へ、主と同じかたちに姿を変える、これが御霊の究極的な働きです。神学用語では、これを「栄化」ということばで表現しています。そのために御霊は言いようもないうめきをもって私たちのためにとりなそうとしておられるのです。ですから、もし私たちが自覚的に聖霊の力に拠り頼むことがないならば、全く役に立たなくなるのです。しかし反対に、私たちが内なる御霊に拠り頼み、その導きに従うなら、栄光から栄光へと変えられていくのです。

●この御霊の究極的目的は、8章 28節のみことばに直結して行きます。

「神を愛する人々=神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて、益としてくださることを、私たちは知っています。」

このみことばの約束は、単に私たちにとってなんでもかんでも自分が益となるために働くということではありません。このみことばは、御霊の究極的な目的、すなわち、私たちがキリストの似姿へと変えられるために、神はすべてのことを益としてくださるということなのです。たとえ、悪魔の誘惑や試みさえも、神のご計画とその目的のためには道具にしすぎません。事実、キリストの十字架がそうでした。悪魔は

十字架によって神のご計画を挫折させようと企みました。しかし神の知恵はそれよりもはるか上でした。神はその悪魔の一見勝利と思えるようなことさえも逆転させて、神のご計画の実現の道具としたのでした。ですから、私たちはこの現実の生活の中で、一見貧乏くじを引かされたと思うような状況に置かれた時、神を信頼しましょう。私たちにはすべてのことを理解し尽くすことはできませんが、その背後に神がおられて、すべてが(神から見て私たちのために)益となるように働いてくださるのです。あなたは、神の主権を信じていますか。

3. 神の主権による御霊の導き

●現在(1995年)、中国では何千万人もの人々がイエシュアを信じています。一日におよそ2万5千人の人々が救われていると言われます。これは御霊なる神の働きとしか言いようがありません。しかし、この神の働きがなされる前に、実は、毛沢東による強力な妨げがありました(雑誌『ハーザー』11月号参照)。

●毛沢東は1949年、全世界に出て行って、(福音ではなく)マルクス・レーニンの共産主義を宣べ伝えよと言いました。ところが、彼の弟子たちが「従いたくても、道がありません」と言いました。道路がなければ共産主義を中国の隅々まで宣べ伝えることはできません。そのために、猛スピードで道路が造られ、道路が網目のように張り巡らされました。

A: (1) 道路の建設 (2) 標準語の敷設 (3) すべての寺院と偶像の破壊、 (4) 印刷機の普及
(5) 文字教育(かなりのスピードで) (6) 文字の簡略化

●これは文化大革命と言われるものです。

B: (1) 教会消滅のための宣教師の追放・・・⇒ 宣教師に頼らなくなった。
(2) 教会の閉鎖・・・⇒ 家庭礼拝がなされるようになった。
(3) 教会の長老指導者たちの逮捕・・・⇒ 信徒が霊的に目覚め、祈りの手が上がった。
(4) 聖書の排除・・・⇒ みことばを暗記するようになった。
(5) 西洋医学(病院の封鎖)・・・⇒ イエシュアの御名によるいやしのわざがなされるようになった。

●毛沢東は中国のために自分の主義主張によってしたいことをしました。神から強制的にさせられたわけではありませんが、かつてエジプトのパロがそうであったように、神のご計画は着々と進んで行きました。神は、神に逆らう者でさえも用いられるのです。中国でのクリスチャンたちの試練は、キリストとともに苦難をともにしている姿です。しかしこの苦しみはやがて受ける栄光と比べるならば、取るに足りない黒字決算であることを信仰によって確信していました。彼らに対する苦難と試練は、世界の多くのクリスチャンたちの励ましです。彼らはますます御子の姿に似た者とされて、神の栄光を輝かせています。私たち日本のクリスチャンも中国のクリスチャンたちから学ばなければなりません。御霊の勝利です。御霊のあるところに勝利があります。神の主権のもとに導かれていることを感謝したいものです。

1995.3.19